

助成年度：平成2年度

[所属] 信州大学 繊維学部

[役職] 教授

[氏名] 桜井 善雄 (他計12名)

[課題]

中部山岳およびその周辺地域における水域生態系の保全と修復に関する研究

[内容]

1. 水辺の植生復元と野生動物（桜井善雄）

地域生態系の重要な構成要素である河岸・湖岸等の水辺の植生を復元あるいは保全しようとする場合、(1)植物の種類を選定、立地条件の整備、植栽の時期と方法など植栽技術に関する問題と、(2)野生動物の生息環境として必要な植生の構造と規模、の2つの問題がわかっていなくてはならない。ここでは(2)について検討した。

水辺に依存する野鳥の生息地の規模としては、諏訪湖の沿岸帯で浚渫と埋め立てが行なわれた前後における鳥類の生息状況の調査結果にもとづいて考察した。それによれば、ガン・カモ類、カイツブリ、バン、等の営巣が可能な生息環境としては、水際線に沿って幅が最小限20~30mで長さが数百mのヨシその他の抽水植物の群落が必要である。またオオヨシキリの永続的な営巣地としては、千曲川の河川敷で行なわれた羽田らの調査結果から、最小限、幅が30~40mで面積2haのヨシ、オギ等の群落がなくてはならない。さらに多様性の高いトンボ群集の生息地としては、上田市の溜池における調査から、地畔に水辺林および適当な密度の抽水植物と浮葉植物の群落が、それぞれ5~10mの幅に存在することが望ましいことになる。

2. 人里環境と野生動物（中村浩志）

長野県下の農村地帯を中心とする人里環境における野鳥の保護について検討した。

長野県下の人里に生息する鳥類のセンサスの結果による個体数の多いスズメ、ムクドリ、ホオジロ、カワラヒワ、モズ、ヒバリ等は、もともと森林に住めない個体数の少ない種であったが、歴史時代を通して人里の開発に伴って生息区域を拡大したものであり、ツバメ、キセキレイ、イワツバメ、セグロセキレイ、トビ等は、元来の生息地である河川や湖沼など開けた場所から人里に進出し、一方、シジュウカラ、キジバト、ヒヨドリ等は森林から人里への適応に成功したものと考えられる。

このような野鳥の生息を支える人里の生態系は、かつては多様性に富み安定していたが、近年の人間による著しい環境変革により、鳥類にとっては住みにくい環境になっている。このような状況のなかで、人間と人里の鳥類の共存を維持していくためには、彼らの生息環境を正しく解明・把握すること、生息環境の確保と保全をはかること、生物学的原理に基づいた鳥獣保護行政を進めることが必要である。そのためには、それぞれの地域環境について、個々の種に対する食物価、居住価、営巣価、安全価を評価するとともに、個々の種の生息密度の把握を通して何が生息の制限要因になっているかを解明しなければならない。このような諸問題について、カワラヒワ、コサギなど水辺に生息する鳥類のほかいくつかの人里鳥類の長野県下における調査結果に基づいて考察した。

本研究が遅れているので、報告書としては十分なものではないが、引き続き本研究を続ける予定である。